

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：25407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531016

研究課題名(和文) 保育所「若竹の園」にみる幼保一体化カリキュラム・保育実践に関する歴史的研究

研究課題名(英文) The Historical Study of a Curriculum and Practice for The Integrated System of Early Childhood Education and Care in Watakenosono Nursery School

研究代表者

高月 教恵 (takatsuki, norie)

福山市立大学・教育学部・教授

研究者番号：40270011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「子どもの養育の社会化」における今日の課題に応えるために、幼保一体化における統一した保育実践をふまえたカリキュラム構築のための予備的研究である。

保育所「若竹の園」および奈良女子高等師範学校附属幼稚園の日誌・資料を整理、分析して、子ども観を明らかにするとともに、保育実践を具体的に描き出してその特質を解明し、近年の保育実践研究(現職研修)を整理、分析して、保育所・幼稚園が求めている保育実践を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is a preliminary research to construct a curriculum for the integrated system of early childhood education and care based on practice with responding to the current agenda of "socialization of child care". This study clarifies the view of children and actual practices through analyzing the diaries and documents of both Wakatakenosono nursery school and Nara Women's Advanced Teacher-training School Attached Kindergarten. This study also indicates what nursery schools and kindergartens are searching for at the current practice by analyzing the studies on daily practice and teacher training.

研究分野：教育学

キーワード：幼保一体化 カリキュラム 保育実践

1. 研究開始当初の背景

21世紀になった今日、女性の就労と少子化が進み、子育ての社会化が強く認識され始めている。子育ての社会化については、これまで伝統的に、二つの文脈で行われてきた。一つは、幼児教育の伝統をふまえた教育の文脈の幼稚園であり、もう一つは、親の養育に欠ける子どもを保育するという福祉の文脈の保育所(園)である。明治以来、日本ではこの二つの文脈は相交わることなく、子ども観(子育て観)においても、子どもの保育観においても、それぞれ別の文脈で理論的にも実践的にも展開され、その成果が蓄積されてきた。

しかし、今日、幼保一体化が政策的に課題になり、0歳児から小学校入学までの子どもの保育を一貫したものとして捉えることが求められ、そのためのカリキュラムの展開を検討する必要がある。

そこで、本研究では保育所「若竹の園」(修養教化団体倉敷さつき会)の幼保一体化カリキュラム・保育実践を明らかにすることによって、今日の幼保一体化における統一した保育実践をふまえたカリキュラム構築のための解決策を見いだしたいと考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は次のとおりである。

(1) 幼稚園、保育所(園)の子ども観(子育て観)の違いをどう統一的に捉えるかについて文献を中心に研究し考察する。

(2) それぞれ伝統的に行われてきた保育所、幼稚園におけるカリキュラム・保育実践について具体的に考察する。

・保育所においては、石井十次の事業を物心両面で支えた大原孫三郎(倉敷紡績社長、1880~1943)によって、大正14年3月に創設された修養教化団体「倉敷さつき会」保育所「若竹の園」の創設以来のカリキュラム・保育実践について研究する。

・「若竹の園」と比較する幼稚園においては、

森川正雄理論に基づいて実践され、戦後、大橋和子を中心として保育が展開された奈良女子大学附属幼稚園(大正元年11月開園)のカリキュラム・保育実践について歴史的に研究する。

(3) 近年の保育実践研究(現職研修)から、保育現場が求めている保育実践・カリキュラムについて考察する。

以上の歴史的、実証的研究は、今日の幼保一体化における政策課題を検討する上でも、幼保一体化のための統一した保育実践をふまえたカリキュラムの構築を検討する上でも、重要な示唆を与えると考える。

3. 研究の方法

研究の方法は次のとおりである。

(1) 保育所「若竹の園」における子ども観(子育て観)に関する研究

(2) 保育実践に関する研究

・保育所「若竹の園」・「奈良女子大学附属幼稚園」における保育実践史研究

(3) 戦後の現職研修と保育現場における研究組織・保育実践研究に関する研究

4. 研究成果

(1) 保育所「若竹の園」における子ども観(子育て観)に関する研究

1925年に大原孫三郎は何を思って保育所「若竹の園」を設立したかについて、大原孫三郎の倉敷紡績(株)の経営理念(労働理想主義・共同作業場理念)に基づいて考察した。その結果、大原孫三郎は90年前にすでに「働く母親の人権(労働権)」と「子どもの最善の利益」を保障して、「養育の社会化」を願って保育所を設立したことが明らかとなった。さらに初代園長であった大原孫三郎の妻寿恵子の詠んだうたから、子どもはすべからく神様から頂いたみ子なのであり、いかなる子どもの人格をも尊重しなければならないという寿恵子の子ども観が、開所当初から「若竹の園」にゆきわたっていたことが明らかになった。

(2)保育実践に関する研究

若竹の園の保育日誌（1925.9.4 - 1926.3.31）を復刻した結果、保育所「若竹の園」は、星組（2・3歳）は保育所（託児所）、月組（4・5歳）は幼稚園の幼保一体化施設であったと考えられる。保育の内容としては、倉敷中央病院（大原孫三郎創設）と連携して子どもの健康管理に重点をおきながら、会集、自由遊び、仕事、園外保育、行事に関するもの等が行われていた様子がうかがえた。会集や仕事の時間には、遊戯・談話・唱歌・手技・観察の保育項目を中心に保育が行われ、手技においてはフレーベルの恩物が使用されていた。そして自由遊びや園外保育に重点を置きながら、子どもの主体性を尊重し、子どもたちが多様な（異年齢）人間関係の中で育ち合う保育実践が行われていたことが明らかになった。

日誌や史料から、家庭と連携をとるために家庭訪問を頻繁に実施し、地域においては子どもの健康相談や妊婦検診なども実施し、夜間裁縫所を開き、必要ならば農繁期託児所も開いた。保育所「若竹の園」は、そこに集う子どもと保護者だけでなく、倉敷というコミュニティに住む人たちの「子育て」「親育ち」のためのセンターでもあった。1920年代中頃という早い時期から「養育の社会化」の問題に取り組み、実践し、今も継続していることが明らかになった。

先の研究（『日本における保育実践史研究』）で、奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育実践（大正元年から昭和18年度）は保育6項目の個々の充実に重点をおきながら教師が中心となって画一的に指導されていた様子がうかがわれたが、各項目においては、自由談話・自由行進等のように子どもの自発性や主体性が尊重されていた様子がうかがわれた。本研究では、さらに昭和13年度の7冊（7組）の保育日誌のうち七夕祭に向けての子どもの様子が一番よく読み取る

ことのできる二之組保育日誌を中心に、プロジェクトの実際について考察した。その結果、七夕祭のプロジェクトの実際は、保育者による題材の提案、昨年の七夕祭の思い出、物的環境、主題（七夕）、教師自身の生活（子どもと一緒に活動する）、大仕掛けな製作活動（表現活動笹飾り）の誘導による保育者主導型の保育であった。しかし各々の活動場面において子どもの自発性・主体性が尊重されていた様子がうかがわれ、同じクラスの子どもたちが共に関わり合いながら園全体の活動へと展開されていたことが明らかになった。

(3)戦後の現職研修と保育現場における研究組織・保育実践研究に関する研究

戦後の幼保合同研究会に焦点をあせて考察した。

保育内容の変遷に焦点をあわせて、保幼小連携・幼保連携について考察した。

尾道市立中庄幼稚園（広島県）における「学びの連続性を確保する接続カリキュラムの研究開発～言葉の育ちを通して～（平成23年度～平成25年度文部科学省指定研究開発）」の研究会に運営指導委員として参加し、保育実践を通して接続期カリキュラムについて考察した。

子どもの0歳児から5歳児の事例をとおして子どもを観る（理解する）ことについて考察し、子どもの観察記録から保育実践（指導計画の作成と展開）への道筋を明らかにした。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

高月教恵、榎原芳子、松姫順子、津田礼子
「翻刻「若竹の園」保育日誌 - 大正14年9

月 4 日～12 月 31 日 - 』『福山市立大学教育学部研究紀要』VOL. 1、2013 年、37～47 頁、査読有。

高月教恵、槇原芳子、松姫順子、津田礼子「翻刻「若竹の園」保育日誌 - 大正 15 年 1 月 1 日～3 月 31 日 - 』『福山市立大学教育学部研究紀要』Vol.2、2014 年、57～72 頁、査読有。

高月教恵「資格と共通教育について - 教育学部保育コース - 』『教育カリキュラム改革への提言』福山市立大学共通教育委員会、2014 年、61～68 頁、査読無。

高月教恵「子どもの育ちと学びの連続性を考える - 日本の保育内容変遷の視点から - 』福山市立大学教育学部研究紀要 VOL.3、2015 年、57～65、査読有。

〔学会発表〕(計 9 件)

高月教恵「保育現場における保育研究組織の変遷 - 岡山県を中心に - 』日本保育学会第 65 回大会、2012 年 5 月 5 日、東京家政大学 (東京都板橋区)。

高月教恵「大原孫三郎「若竹の園」創設の理念と実際」日本福祉文化学会全国大会・シンポジウム、2012 年 9 月 29 日、倉敷市芸文館(岡山県倉敷市)。

高月教恵「大原孫三郎「若竹の園」設立の背景と理念」大原孫三郎・總一郎研究会、2012 年 12 月 7 日、倉敷公民館(岡山県倉敷市)。

高月教恵「戦前の「若竹の園」保育の実際 - 内容、保護者・地域連携を中心に - 』日本保育学会第 66 回大会、2013 年 5 月 11 日、中村学園大学 (福岡県福岡市)。

高月教恵「幼保小の円滑な接続に向けて」第 56 回広島県国公立幼稚園連盟教育研究大会・招聘講演、平成 26 年 11 月 14 日、因島中庄公民館 (広島県尾道市)。

高月教恵「奈良女子高等師範学校附属幼稚園のプロジェクトの実際」日本保育学会第 68 回大会、2015 年 5 月 10 日、椋山女学園大学

(愛知県名古屋市)。

高月教恵「倉敷さつき会保育所「若竹の園」設立の理念と保育の実際」幼児教育史学会第 11 回大会・シンポジウム、2015 年 12 月 5 日、福山市立大学 (広島県福山市)。

高月教恵「保育記録から読み解く保育の構築」平成 27 年度広島県幼稚園教育課程研究協議会・招聘講演、2015 年 8 月 25 日、安芸区民文化センター (広島県広島市)。

〔図書〕(計 2 件)

鈴木昌世・佐藤哲也編『子どもの心によりそう保育・教育課程論』福村出版、2012 年、131～144 頁。

安川悦子・高月教恵編『子どもの養育の社会化 パラダイム・チェンジのためにー』御茶の水書房、2014 年、15～42 頁、149～152 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高月 教恵 (TAKATSUKI NORIE)
福山市立大学・教育学部・教授
研究者番号：40270011